

いろいろなことを教えてくれる子どもたち (9)

村 石 京 子

● 空を見ているてるてる坊主

今年の梅雨は随分よく雨が降りました。園外保育などを予定していても、雨のため延期になることが再三で、いつも天候が気がかりだったものです。

子どもたちも同じ思いだったのでしょうか。遠足の前日に、誰かがつくり出したのがきっかけとなって、我も我もとてるてる坊主つくりにいそがしい日もありました。保育室の窓辺近くには、てるてる坊主がずらりと並

んでつる下がっています。

おとなの感覚だとてるてる坊主は白い紙で簡単につくられるのですが、今日のそれは子どもたちの思いをこめられて、目鼻は勿論のこと、リボンをつけてもらったり、色紙で夫々によく似合う着物を着せてもらったりして飾られてあります。I 夫はものをつくるのが好きな子どもですが、「僕はお父さんのてるてる坊主をつくりたい。」と言って、随分と大きなものをつくり、それが窓辺でゆら／＼風にゆれていると、友だちは「わあ、ジャ

ンボだ。」などと批評しあったりしています。K子も「私も大きいのがつくりたい」と言っていたのに、出来上がったのははた目にはあまり大型とも見えませんでした。割合と満足な様子なのは、自分の中にあるイメージと重なったからなのでしょう。

帰りしなに、明日お天気になるように頼みましょうという事になって、てるてる坊主のうたなどうたっていたときの事です。S男が急に「K子ちゃんのとてるてる坊主、本当にお空を一生懸命見ているみたい。」と言うので、みんな「あ、本当。」「明日お天気に出来るかなって考えてるんだね。」などと話しあってしまいました。普段は結構いろいろ心得てもう何でも知っているよといったげなところのある子どもたちの会話だから面白いのです。

いつもは元気一ぱいで強い男の子の様子のS男でさえも、どうも毎日の雨続きには明日の遠足の空模様が心配でしょうがなかったのでしょう。自分の気がかりな思いを、てるてる坊主もくんでくれて、一生けんめいお空を

見てると思ったのでしょうか。思わず言ったS男の言葉は、時を得てみな共感を呼びました。

いつもは仲々の気強い男の子と見える子どもも、違う場面では心の中はまだ子ども子どもとしている一面を見せたりして、ほほえましいものです。またそれはある角度から考えれば、その子どものもつ繊細さ、優しさと見ることも出来ます。私たち教師は、子どもを固定的な目で見ることをしてしないように心がけ、いつも子どものも多面性に目をむけるようにし、子どものもついろいろな面に気づくことをしなければならぬと思います。それについても、子どもの中は純であり、可愛いものなのですね。

● 自然とふれあう子どもたち

梅雨の晴れ間のある日、子どもたちは喜々として庭へ飛び出して行きます。山の雑草園でも、楽しそうに草つきをして遊んでいます。生い茂った雑草も、子どもたちの手にかかれば、それはスバゲッティになったり、焼き

そばになったり、そしてお米になってお米屋さんの店先にも一ぱいのせられています。そんな遊び方をしている子どもたちと一緒にいて、雑草もどんと自分たちの遊びの材料に変身させていくその創造力には、いつもながら全く感心してしまいます。

そして大きくなった雑草は、抜いて遊びの材料にふんだんに使っている一方で、芽生えたばかりの小さな草や花は、大事に育てたいという気持もあって、そういう場所ではふまないように、そうっと「指先歩き」で軽く歩くのだそうです。つま先でそうっと歩くことなのですね。小さな花や草の生命を大事にしたいという、そんな優しさもかいま見せてくれる子どもたちなのです。

そして暫く山で遊んでいて、下の園庭に下りてくると、あら、さっきまで一緒に山で遊んでいたS子は、何だかいそがしそうに砂場のふちで、滴んで来た草をバケツに入れて熱心に洗っているところでした。砂場には水が一面に張ってあります。さて何がはじまるのかな、草はごちそうかしら、まぜ御飯の材料なのかしらなどと思

いながらも、部屋の中の子どもに呼ばれて、S子の遊びの行方は見届けられないまま、部屋に入りました。

暫くして「ね、ね、先生、見て、田植えしたのよ、見て。」というS子の呼びかけに砂場へ行って見ると、いつも子どもたちにお米と呼ばれている雑草が、三、四本ずつ束ねられて、水面の砂場の中に形よくちょん、ちょんと並んで立っています。それは本当に小さな水田さながらの風景でした。

思いがけない砂場の様子にびっくりして、「あら、Sちゃん上手ね、どうしてそんなに上手なの。本当のお百姓さんみたいね。」と言うと、さも嬉しそうににこにこして、「だってご本で見えて知ってるのよ。田植えないと、お米がとれないでしょ。いちごも、赤かぶも、トマトもおなすも幼稚園で植えたけど、お米はまだ植えてないの、私がやっておいだの。」と言います。

本当にこの子は植物に関心が強く、いちごが赤く熟れてくるといつも私に知らせてくれ、なすの花が落ちて小さな紫の実を結ぶと、いとおしそうに日々の成長を観察

している子どもなのです。S子はなすやトマトと同じように、この砂場の田植えでお米は育つと思っているのでしょうか。もしそうだとしたら、何と言えはよいのだろうと、私は一瞬思いめぐらしてしまったものです。でもその心配は、杞憂でした。充分遊んで、そして遊びが認められたことに満足したS子は、片づけの時間になると、自分でさっきの田植えの苗をきれいにさっさと片づけていきました。

「どうするの？」と聞くと、「おうちへ持って帰ってA子ちゃんとお米屋さんごっこするの。」と言って、ビニール袋にしまつて持つて帰る用意をしていました。きつと今日この子の家では、あの草は妹のA子ちゃんに「私が植えたお米なのよ。」などとお姉さんらしい説明とともに、ままごとの材料に使われたことでしょうか。私は何だかホッとしたり、思いがけない遊びを都会の子どもの中に見て、びっくりした日でした。

それにしても子どもは、まわりの環境からいろいろなものを感じとったり、学習したりしているのですね。そ



して遊びながら、いろいろ考えたり、実験して見ようと思いたったりして、確実に成長しているのだということを知りました。そして五才児ですでに、遊びの“ごっこ”と、現実を識別していく力も育っているのだという一面もわかったのです。

そしてまた、ある土曜の午後のことです。幼稚園の卒業生の小学校三年生になった子どもたちが、幼稚園で級会を開きました。久しぶりに一堂に会して、大人も子どもも話はずみしました。中でもお母様たちは、いつまでも近況報告で積る話がつきません。やがて子どもたちの方は、勝手知ったる以前の我が家とばかり、思い思い外に飛び出して遊びはじめました。

そして時折顔を見せると、真赤で汗びっしょり、本當に久しぶりに幼稚園で遊べて、もう夢中という感じでした。やがて予定されていた時間があつという間に経ち、会場に戻って来た女の子たちがそろつと来て、「先生、目つぶっていてね。」と言って後にまわり、頭につけてくれたのはクロローバーの白い花で編んだきれいな冠でした。

「ありがとう」「わあ、先生すてきよ。」などというやりとりの後、会はやがて閉会となりました。

皆が名残りおしげに帰ったあとで、白い花の冠を手にしたがら思いました。なつかしい幼稚園に来て、山で遊んだ子どもたちは何年か前のことを思い出したのでしょうか。幼稚園児であつた頃、山で遊んだ毎日の中に、草つきをしたことも思い出したのでしょうか。その中には、私がつくってあげたクロローバーの冠のこともあつたのでしょうか。誰が言い出したのか、何人かで一緒に編んだ太い美しい冠は、私が以前に子どもたちにつくってあげたものよりずっと立派でした。子どもたちは、こうやって時が経てば、きっと今度は私ども教師に対して、そして勿論両親に対して、社会に対して、以前自分がしてもらつた以上のものを、有形無形で返してくれる日があるのだということを思つたものでした。

（お茶の水女子大附属幼稚園）